

始まりました！ 浜松文芸館 春の講座・講演会

まばゆいばかりの新緑、色とりどりの花々。梅雨入り前のひと時、もう少しこの美しい日々を楽しみたいものです。さて、浜松文芸館の講座も満開です。本年度は、17の講座と



講演会、朗読会が各2つと前年度に比べ4つほど増えました。定番の「文学講座（春）雨月物語」、「文章教室Ⅰ」

「川柳入門」も順調にスタートしました。6月から「短歌入門」「俳句入門Ⅰ」「朗読教室」、新講座として「歴史と文学」が始まります。多くの応募があるため、抽選せざるを得ない状況です。抽選にもれた方には申し訳ございません。また、秋の講座に応募していただけるとうれしいです。受講される方々の動機も様々ですが、皆様の『学びたい、知りたい』という強い意欲を感じます。受講後に寄せられるアンケートには、学ぶことや知ることの楽しさが書かれています。私も、先日の講演会『歴史と文学探訪』を聴いて、こんなことを思いました。歴史を学ぶことは、これからをどう生きるかを考えることにつながるのだと。それは、ただ今開催中の企画展「井伊家と遠州の城砦」についても言えることです。じっくり観覧してくださったある一人のご婦人が、帰り際に「今まで知らなかったことがたくさんありました。知ることができて楽しかった。このことをこれからの人たちにしっかり伝えていくのが私たちの役目かしら。」と感想を寄せてくれました。この役目は、浜松文芸館の使命でもあります。浜松の文芸人の偉業を顕彰し、市民の皆様の生涯学習の支援をしながら、浜松の文化の一翼を担う浜松文芸館。今後も様々な取り組みを通して、浜松の文化の灯を大きくしていきたいと思っております。皆様のお越しを心よりお待ちしております。



また、秋の講座に応募していただけるとうれしいです。受講される方々の動機も様々ですが、皆様の『学びたい、知りたい』という強い意欲を感じます。受講後に寄せられるアンケートには、学ぶことや知ることの楽しさが書かれています。私も、先日の講演会『歴史と文学探訪』を聴いて、こんなことを思いました。歴史を学ぶことは、これからをどう生きるかを考えることにつながるのだと。それは、ただ今開催中の企画展「井伊家と遠州の城砦」についても言えることです。じっくり観覧してくださったある一人のご婦人が、帰り際に「今まで知らなかったことがたくさんありました。知ることができて楽しかった。このことをこれからの人たちにしっかり伝えていくのが私たちの役目かしら。」と感想を寄せてくれました。この役目は、浜松文芸館の使命でもあります。浜松の文芸人の偉業を顕彰し、市民の皆様の生涯学習の支援をしながら、浜松の文化の一翼を担う浜松文芸館。今後も様々な取り組みを通して、浜松の文化の灯を大きくしていきたいと思っております。皆様のお越しを心よりお待ちしております。



館長のひとり言・人生とは出会いである

28年度末の人事異動により、この4月から浜松文芸館に赴任した職員を紹介します。講座や講演会、市民文芸担当の内藤益美さん。庶務担当の横田誓子さんです。二人ともやる気満々！頼もしい浜松文芸館のスタッフです。私たち三人のモットーは、【いつでもどこでも誰とでも、そして何度でも挨拶】することです。どんな組織も支えるのは人。その人間関係づくりのもと挨拶。どうせ挨拶するなら明るくにこやかにしたいものです。そして、袖すり合うも多生の縁。浜松文芸館の講座で一緒した方々のお付き合いが続いたり、同好会が立ち上がったりと、本館での出会いが広がっていく様子を見るとうれしく思います。

「人生とは出会いである！」という言葉を聞きました。その通りですね。全ての出会いには意味がある。その出会いを大切にしたい浜松文芸館です。

湖郷の詩人清水みのる 9 浜松中学校退学、京都予備校へ

浜松文芸館講演会 講師 和久田雅之

産婆をして女手一つでみのると弟を育てるために孤軍奮闘していた母の思いをよそに、彼は停学処分を受けてしまった。その頃の彼は、言いようのない倦怠感と寂寥感に囚われ、現実に眼をそむけ自己を見失っていたようだ。

そんな中で起きたキセル事件は、「浜中を退くなら今が最適の時だ」と考えるようになった。が、

なお一抹の不安もないではなかった。そこでぼくは特に親しい友人にそれを相談してみた。大和染工社長の鈴木清蔵さんの実兄で今は亡き松下源蔵君や、三ヶ日出身で今は津山で眼科医を開業している淀川君、高等商船を出て現在船長をしている市川敏郎君などは、ぼくの無軌道ぶりを強く非難して処分の解ける日を待てとすすめてくれた。

しかし、文学愛好家グループの友人たちは、浜中退学後のみのるの飛躍を祝って三社神社前の菓子屋亀屋で壮行会を開いてくれることになった。亀屋は現浜松北高の正門前、左手にある三社神社と道を隔てた右側にあった。長い間浜松中学校、後世の浜松北高のたまり場だったところである。

肝心の母の気持ちはどうだったかというと、

親類の手前や隣近所への体面上、停学になったぼくを家に置く気にはなれなかったらしい。どこでもいい、誰も知らない所に預けられるなら預けて、この放埒な次男坊の教育をたのみたかったのである。

それから間もなく、「浜名湖から吹きつける空っ風がいやに肌にしみる頃」のある日、京都中学校に転校した二俣出身の級友を頼って京都予備校に入るために、浜松から汽車に乗って京都に向かった。母と二人、人目を避けての夜逃げのような初旅だった。

「学校を卒業して来るまでは家に入れないよ」という母の顔は悲しく歪んでいた。ぼくにはいつでも優しくあった母だったが、この時ほど母の泣顔の厳しかったことは今でも忘れられない。

「わが退学の記」(昭和38年3月号 『浜松百撰』)

と40年後にその日のことを述懐している。

しかし、昭和47年2月の浜松ロータリークラブでの卓話(演題「浜名湖の思い出」)では、「1ヶ月の停学処分を受けたので、放校されたと思っていらっしゃるだろうが、4年修了で予備校に行ったのである」「文学などとはもってのほかと云われ、母に内緒の出発であった」と言っている。佐藤礼云校長が「京都予備校を出れば4年修了を認める」という特別措置をしてくれたのであろうか。みのるが停学処分を受けたのが大正9年(1920)の晩秋から初冬まで。翌10年4月に京都へ移っている。まさにこの時、井上靖が浜松中学に首席入学を果たしている。みのるが4歳年長である。もし、みのるが予備校に行かないか、靖がストレートで入学していれば二人は5年と1年に在籍、靖も柔道部に入ってから、何らかの交流が生まれていたかも知れないのである。